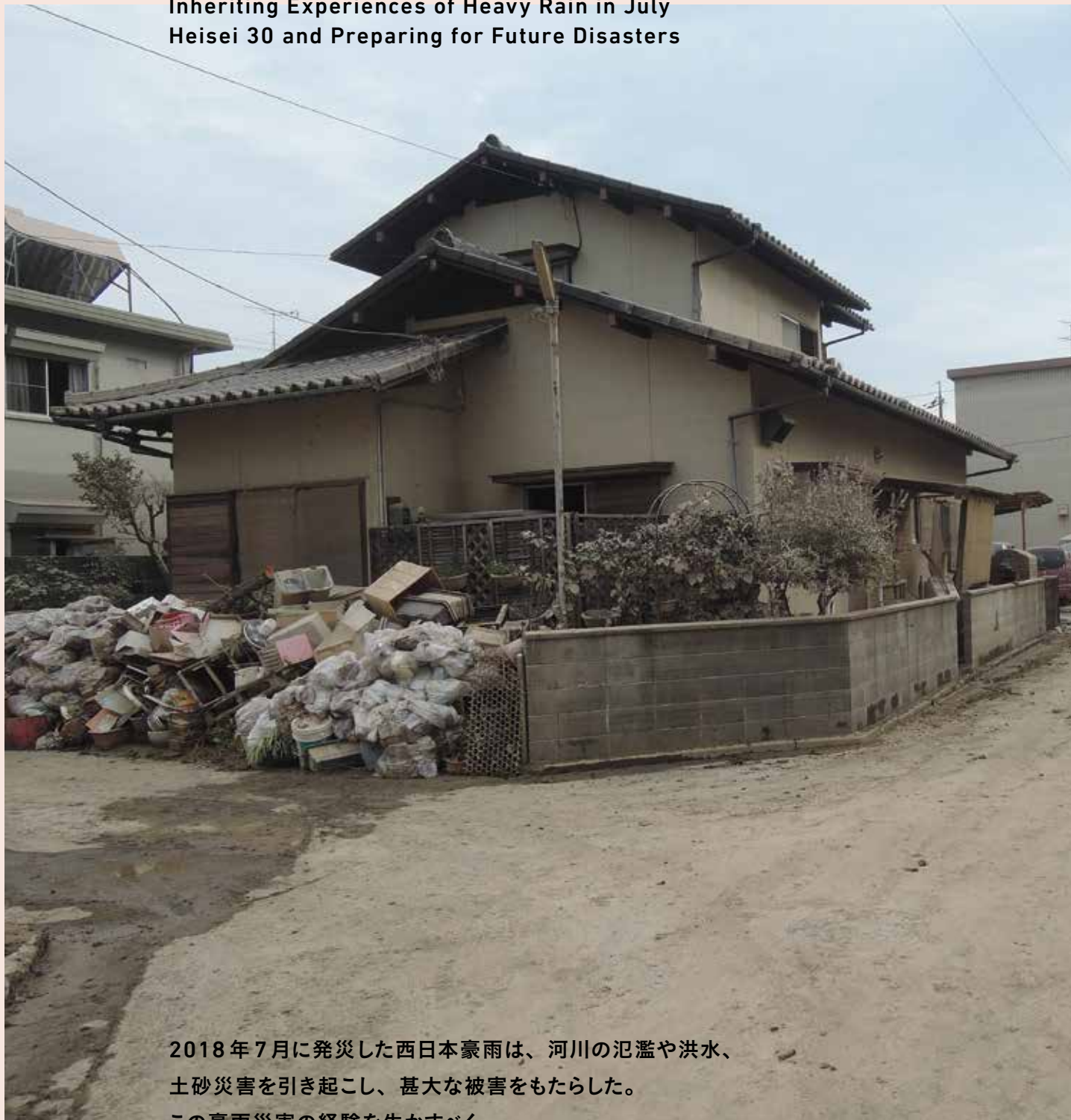


西日本豪雨災害の経験を伝え、 備える — 倉敷市真備町

Inheriting Experiences of Heavy Rain in July
Heisei 30 and Preparing for Future Disasters



2018年7月に発災した西日本豪雨は、河川の氾濫や洪水、土砂災害を引き起こし、甚大な被害をもたらした。

この豪雨災害の経験を生かすべく、

岡山県建築士会倉敷支部の会員有志によって作成されたのが、冊子「水害に備えて」だ。

その活動の中心的役割を担った中村陽二氏に、当時の話を聞いた。

中村陽二 | Yoji Nakamura
岡山県建築士会倉敷支部、リスブ環境・
都市建築研究所

聞き手

佃悠 | Haruka Tsukuda
東北大学 / 会誌編集委員会委員

前田昌弘 | Masahiro Maeda
京都大学 / 会誌編集委員会委員

費川雪=文



fig.1 泥だらけの町：豪雨災害後しばらく雨が降らなかったこともあり、浸水市街地では道路や建物を覆った泥が乾き、やや黄色がかった灰色の世界となった（提供：中村陽二氏）

被害の概要

——特に被害が大きかった岡山県倉敷市真備地区について、災害が発生した2018年7月6日の状況からお聞かせください。（前田）

中村 雨が強まり始めた15時ごろ、私は倉敷市内の事務所で、現場に出向いていたスタッフから「雨が強く帰社できないかもしれない」と連絡を受けました。そのため16時ごろ、全員に帰宅指示を出し、私も17時には倉敷駅北側の自宅に帰りました。このときは、まだこんな大災害になるとは思ってもみませんでした。

その後も雨は強さを増し、とても外へは出られない状態になりました。避難の必要性も脳裏によぎりながら自宅で待機していましたが、22時ごろに真備地区全域に避難勧告が、その後、県内の各地域に次々と大雨特別警報が発令されました。そして23時半ごろ、非常に大きな爆発音が聞こえました。真備地区北部の総社市下原で、アルミ工場が爆発したのです。周辺に延焼し、近隣住民は豪雨と火災というとんでもない事態にさらされました。当時、私はまだ何が起きたのか知りませんでしたが、なにせ豪雨のなかでも聞こえた轟音と、家が揺れるほどの振動があったため、これはただごとではないと感じました。慌てて避難の準備をし、少しでも高台を目指し、2キロほど離れた事務所近くの神社に向かいました。出発時、周辺の住宅の電気は煌々とついていて誰も逃げる気配がなく、一瞬、気にしすぎかと躊躇しました。しかし、高齢の母とペットの小型犬がおり、逃げ遅れたらより大変なことになると感じ、妻と相談して避難を決定しました。幸い、神社には10分もかからず到着しました。

爆発音がしてほどなく発令された避難勧告では、神社とは逆方向にある高梁川に近い「イオンモール倉敷」の立体駐車場が避難場所に指定されました。しかしイオンモールへの道路はひどい渋滞で、簡単にはたどり着けなかったと、後から近隣に住むスタッフに聞きました。

その後も深夜から未明にかけて、経験したことのない量の雨が降り続き、真備地区では高梁川支流の小田川やさらにその支流で越水や破堤が複数発生し、真備地区中心部の大半が4～5メートル、最大6メートル近く浸水しました。避難が間に合わず、建物の屋根や屋上で救助を待った人もいました。朝4～5時ごろになって、ようやく雨が小康状態となり、私と家族は自宅へ戻りました。

——真備町の被害状況はいかがでしたか。（前田）

中村 発災当時、真備町に入るルートは数本に限られていました。そのうち、南側から小田川を渡って町に入るルートを通して土手から橋に上がると、町はやや黄色が

かった灰色の世界に一変しており、あらゆる建物が濁水を被っていました。また、その後しばらく雨が降らなかったために泥が乾き、今度はひどい土埃に悩まされ、とても復旧作業どころではありませんでした fig.1。泥自体も、工場やガソリンスタンドなどから流出したさまざまな物質を含んで原油のようにねっとりしており、自動車に付着すると高圧洗浄でなければ落ちないし、洗濯でも苦労しました。そんな状況が1週間ほど続きました。

停電期間も長かった。被災後5日以上が経ち、ようやく信号や街灯がつきました。電気が戻るまでの期間は、警察官が昼は信号に代わって交通整理をし、夜は空き巣被害予防のため町を巡回しており、常に物々しい空気が漂っていました。また、道路脇には瓦礫やごみが積み上がり、まるで終戦直後のような景色にショックを受けました。岡山県全体では、61人が亡くなり、8,000棟以上の住宅が全半壊しました。

冊子「水害に備えて」の制作

——被災後、中村さんや建築士会倉敷支部の皆さんが取り組まれた復興支援活動について教えてください。(前田)



fig.2 「現場に貼って使える 応急対応シート」(一部)：(建築士会倉敷支部 HP よりダウンロード可能)



fig.3 冊子「水害に備えて」他：中村氏は豪雨災害以前から、倉敷市美観地区の街並み保全等に関わり、その成果を町の歴史や見所を紹介するマップや防災マップ等にまとめた

中村 1週間後(14日ごろ)には、駆けつけたボランティアの方々が、民家の片付けを手伝わっていました。泥まみれの家財や流入したごみは水を含んで重く、それらを住戸外に引っ張り出すだけでも大変だったと思います。

しかし、こうした作業のなかで、ダメになった建具や断熱材と同等に、建物の筋交いまでもが除去されてしまう事例が散見されました。1階が柱だけのピロティ状になってしまった住戸もあり、二次被害を招きかねない状態になっていたのです。そこで、床の剥がし方など解体作業の手順や、撤去時の注意事項を記載した「現場に貼って使える 応急対応シート」¹を大至急作成して配布しました fig.2。

次の段階として、貼り紙ではカバーできない情報をまとめたマニュアルの必要性を感じました。そこで有志が集まって、過去に同様の被害を受けた他の地域のマニュアルを参考に、制作を開始しました。

——それが「水害に備えて」(発行＝岡山県建築士会倉敷支部・倉敷市²) fig.3ですね。発災前の備えから被災時の対処法、被災後の復旧や住宅再建にいたるまで、これほど整理されたマニュアルは他にないと思いました。このように非常に長いスパンに言及されたのは、どんな想いがあってのことでしょうか。(前田)

中村 高梁川は自然豊かで、地域にとって親しみのある川です。災害は辛いものです。しかし普段の川の恵みを忘れて護岸工事のような対策をすることにも、いささかの違和感をおぼえました。住民の側からできることがあるのではないかと。倉敷市には、数多くの古地図や古文書、石碑が残存しており、人びとが長年どのように自然と付き合い合ってきたかを知ることができます。その知恵を後世に伝えていくべきだと思ったのです。

災害後に生まれた新たな取り組み

中村 現在は、社会福祉協議会(社協)とともに、被災住宅の長期居住者に向けた支援をしています。障害や貧困、引きこもりなど、社会的な困難によって被災住宅の復旧ができない人、あるいは過去に悪徳リフォーム業者に騙されたトラウマなどで、修繕の相談先が見つからない人など、さまざまな理由で被災した住宅にそのまま住み続けている人たちがいます。そうした人びとに、DIYによる修繕を提案し、必要なもののリストの配布やアドバイスをしています。

きっかけは、被災後の住宅相談会会場として社協に場所を借りたことでした。「障害者や困窮者の家に、建築の専門家として行ってほしい」という打診を受け、ケース

ワーカーに同行して訪問アドバイスをするようになりました fig.4。おかげで、自分で自宅の修理をした人や、プロの大工並みの建て替えをした人も現れました。また併行して、社協を中心に、法律関係者や私たち建築士、ボランティア団体が集まる多機関協議会を立ちあげ、現在も毎月一回のペースで意見や情報の交換を継続しています。

— 社協が良いハブになり、社会的弱者に必要な情報や専門家の支援を届けられるようになったわけですね。建築士会の皆さんとつながれたのは、社協にとっても大きなことだったと思います。(佃)

教訓と今後の展開

中村 歴史上、真備町地区は幾度も水害に見舞われてきました。しかし、前回この地で大きな水害が起きたのは、1970年代です。今回の西日本豪雨は、前回の水害から長く時間が空いてしまったことで、教訓を後世に伝えきれなかったという反省があります。災害のなかったこの期間は、国中がモノを作れば豊かになれると確信していた、高度経済成長期と重なります。真備でも同様に、産業が



fig.4 被災住居長期居住者への訪問アドバイス：建築士とケースワーカーが被災住宅を訪れてDIYによる修繕の提案等を行っている(提供：中村陽二氏)



fig.5 水流で地面が削られ露出した建物基礎：地盤改良（柱状改良）の跡からかつて低地の農地を宅地開発したことが窺える(提供：中村陽二氏)



fig.6 高校生への防災教育の様子：浸水時にドアにかかる水圧を体験する(提供：中村陽二氏)

盛んになって人口が増加し、宅地の必要性が高まりました。その結果、水害の教訓を忘れ、低地にまで住宅を建てざるを得なくなってしまった。被害を受けた住宅から当時の痕跡がみつかりました fig.5。今回の支援の背景には、私たちもその時代を生きてきた建築人のひとりだ、という自戒と罪滅ぼしの気持ちもあります。

しかし、一概に高台へ人を移していこう、という活動もしていません。なぜなら、水害が起きそうな場所にどうしても住まなければならない人もいるからです。こうした人々に向けた提案にも力を入れています。

— 気候変動の影響から、今後も災害はより大きくなっていくことが予想されます。また、地域のコミュニティも失われつつあり、高齢者や単身世帯も増加しているし、高台だから安心ということではない。どんな場所に住んでいても、誰もが罹災する可能性が十分にありますね。(佃)

中村 それをまさに私たちが伝えていかなければなりません。私たちはこの他にも、市内の高校生に、ハザードマップを携えたまち歩きや、浸水時の水圧によるドア開閉の困難さを体験してもらうといった防災教育もしています fig.6。

目指しているのは、そのときごとに災害を乗り越えることだけではありません。彼らが40、50代になって社会の中核を担えるようになった時、こうした経験が役に立つと信じています。災害への恐れや気持ちとその受け止め方としての防災を、進路はそれぞれ違えども共有し合えることで、あらゆる社会のジャンルで災害に取り組めるような人材になってほしい。それが、私たちの願いです。

2022年11月21日、リスブ環境・都市建築研究所にて

- 1 <https://kurashikishibu.wordpress.com/>よりダウンロード可能
- 2 同上

岡山県建築士会倉敷支部HP

